

# 図書館だより



No. 8

平成 29 年 12 月 22 日



今年も残すところあと僅かとなりました。2017 年の締めくくりをみなさんはどう過ごす予定でいますか。大掃除に精を出す、1 年の疲れを落とすためゆっくり過ごす、お世話になった人に年賀状を書く、など色々な過ごし方があるかと思いますが、心残りを作らずに新しい年を迎えましょう。

さて、来年は冬季オリンピックの年。韓国の平昌(ピョンチャン)で行われる今回のオリンピックでも、各種目で日本人選手の活躍が期待されていますね。気合を入れて応援していきましょう。みなさん自身はウィンタースポーツをやっていたり、挑戦したいと気になっていたりはするでしょうか。としまえんには屋外アイススケート、西武ドーム隣には狭山市スキー場と、この近辺にもウィンタースポーツを楽しめる場所があります。冬休みにはそうした施設で体を動かして過ごすのもいいですね。その際には怪我に十分気をつけて楽しんでください。

\*鍋を囲みながら、みんなで思い出を語ろう

## 596-ウ『鍋レシピ』 植松 良枝 || 著 榎出版社

身も心もあたたまる冬のごちそうといえば、お鍋。今年の冬はいつもの定番鍋を楽しみつつ、新しい味の開拓を試みませんか。冬瓜と鶏ひき肉の鍋やきのこ鍋などのあっさり鍋もおいしそうですし、海鮮キムチトマト鍋やバターチキンカレー鍋などのこってり鍋にも心惹かれます。さらには、台湾風獅子頭鍋やししゃけとじゃが芋の北欧風鍋など世界の味を楽しむ鍋も気になりますし、さば缶やツナ缶など缶詰を使った鍋も手軽で試してみたいところ。

そして、鍋の楽しみである「シメ」のおすすめレシピも紹介されているのがこの本の魅力でもあります。これだけバリエーションがあれば、毎日でも鍋が食べたいと思ってしまうですね。

\*フィギュアスケートのテクニックを知る

## 784-オ『華麗に舞う！魅せるフィギュアスケート 50 のポイント』 メイツ出版

フィギュアスケート選手が氷上で見せてくれるジャンプ、ステップ、スピンなど華麗な技の数々。「どうしたら、あんなことができるのだろう」と思わずにはいられませんよね。

この本にはそれぞれの技の解説と上達のためのポイントが載っています。フィギュアスケートの経験があり、ある程度滑ることのできる人にとってはレベルアップのために役立つ本となるでしょうし、「スケートは見て楽しむ」という人にとっても選手たちがどんな体の動きを使って、それぞれの技を行っているのかを知るのに役立つ本だと思います。読みながら、イメージを浮かべるだけでもきっと楽しいはず。

## 2017 年これを読まなきゃ終われない

日系イギリス人小説家カズオ・イシグロさんのノーベル文学賞受賞に日本中が湧いた 2017 年。秋草の図書館では、映画化された島本理生さんの『ナラタージュ』や“4 回泣きます”のキャッチコピーが印象的な川口俊和さんの『コーヒーが冷めないうちに』が人気でした。「今夜私は鹿鳴館の夜会に出ます」「政治、政治、政治かね」など三島由紀夫の『鹿鳴館』のセリフも密かに流行りました。「今年 1 番の出会いだった！」と思う本は何でしたか。私にとっては梶井基次郎の『檸檬』です。今もレモンを見かける度、思い出します。

## B933-イ『日の名残り』 カズオ・イシグロ || 著 早川書房 ◆推薦者 鈴木司書◆

イシグロさんの長編小説には『遠い山なみの光』『浮世の画家』『日の名残り』『充たされざる者』『わたしたちが孤児だったころ』『わたしを離さないで』そして、ノーベル賞を受賞した『忘れられた巨人』があります。『忘れられた巨人』も読んで欲しいのですが、正直この作品は難解に感じる人が多そうです。そこでイシグロさんの作品に慣れるという意味で、『日の名残り』を試してみてもはどうでしょう。国政を左右するほどの貴族に仕えた執事が、ドライブ旅行をしながら華々しかった過去を回想する物語は、読後とても切なくなります。職業人に徹した彼が抱き続けた“問い”。それは読者にも疑問を投げかけてきます。イギリス小説に日本的な抒情性を加えると、こんなに美しい世界になるのですね。

## 784-ウ『やさしく、強く、そして正直に』 上村 愛子 || 著 実業之日本社

◆推薦者 鈴木信晃先生◆

僕は高校 3 年の時、大学受験で大きな挫折を味わった。時を同じくして、女子モーグル上村愛子選手は日本代表としてバンクーバーオリンピックに出場し、最後の最後で表彰台を逃した。惜しくも 4 位で終えて「なんで一段一段なんだろう」と涙を流しながらインタビューに答えている姿を思い出す。上村選手はスポーツ選手、僕は一受験生。戦う土俵は違うが、同じ気持ちを抱いた。「なんで一段一段なんだろう」って。

何事も結果が求められているのは仕方がないことだし、うまくいく人なんて正直ほんの一握り。でもその一握りになりたいと人は努力する。努力に限度はない。やれるだけやってみようじゃないか。頑張れ、受験生！

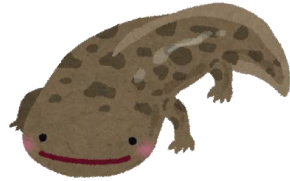
## 913.6-ス『さよなら、田中さん』 鈴木 るりか || 著 小学館 ◆推薦者 今井司書◆

この本を書いた鈴木るりかさんは、なんと現在、中学二年生。小学生限定の新人公募文学賞「12 歳の文学賞」で小学 4 年生から 6 年生まで、3 年連続で大賞を受賞。そして、今年 14 歳の誕生日に『さよなら、田中さん』で小説家デビューを果たしました。一体どんな小説を書く子なのだろうと、興味津々に読み始めましたが、これがとてもおもしろい。小学 6 年生の花と、花をひとり育てるお母さんの日常がテンポよく描かれています。いつも元気で、とにかくよく食べるお母さんと、お母さんのよいところを引き継ぎ、前向きでツッコミもうまい花。どんな苦労も笑って吹き飛ばせるたくましいふたりから、家族のあたたかさ、生きる力が伝わってきました。将来が楽しみな 14 歳の小説家さんです。

## ✍️ 日本の誇れる文豪たち ~近くて遠い昭和作家編~ ✍️

近くて遠い昭和作家編の3人目は井伏鱒二です。

井伏鱒二といえば、代表作としてまず『山椒魚』が浮かぶ人が多いのではないかと思います。「山椒魚は悲しんだ」で始まるこの作品は当初、『幽閉』という名で発表された井伏の処女作でした。それが発表から6年後作中に蛙を新たに登場させ、『山椒魚』という新たな名に生まれ変わり、発表されました。初めて小説で原稿料をもらえたのは昭和2年『歪なる図案』を発表した時で、井伏は29歳でした。その後、多くの作品を発表する中で、昭和13年には『ジョン万次郎漂流記』で第6回直木賞を受賞、昭和18年から32年の間は同賞の選考委員を務めました。終戦後に発表した『黒い雨』は被爆者の日記を基にした小説で、「」これによって第19回野間文芸賞を受賞しました。米寿から翌年にかけては自選全集を刊行するなど、95歳の生涯を閉じるまで意欲的に活動されていました。



\*あの名訳も実は井伏鱒二

B911.5-I 『厄除け詩集』 井伏 鱒二 || 著 講談社

『「サヨナラ」ダケガ人生ダ』どこかで聞いたり、目にしたりしたことのある人も多いであろうこの一文。これは中国の詩人 于武陵の詠んだ『勸酒』という漢詩を井伏鱒二が訳したものです。小説だけでなく、このように井伏鱒二は漢詩訳でも名訳を多く生み出した他、自身も多くの詩を書いています。

この『厄除け詩集』は四部構成で、詩人としての井伏鱒二と訳者としての井伏鱒二を楽しむことができます。『「サヨナラ」ダケガ人生ダ』のように彼の言葉にはフツと心に刻まれ覚えてしまう響きのよさと魅力があります。自分の心の琴線に触れる言葉を探しながら、気に入ったものは声に出してみることで詩をより楽しんでほしいなと思います。

\*2匹のあいだに生まれたものは

B913.6-I 『山椒魚』 井伏 鱒二 || 著 新潮社

表題の『山椒魚』を含む12編が収められています。『山椒魚』は自分の棲家である岩屋から2年ほど出ないうちに体が成長し、出口に頭がつかえて外に出ることができなくなってしまった1匹の山椒魚の物語です。強がってみせたり、勢いに任せて出口に突進してみたりしてみても、ちっとも外に出られる気配はなく、じわじわと広がる山椒魚の悲しみ、絶望感は読者にも伝染します。「もし自分が山椒魚だったら、どうするだろう」と思わずみんな考えてしまうのではないのでしょうか。

やがて岩屋には1匹の蛙が滑り落ちてきて、この蛙は災難なことに山椒魚の巻き添えをくらうのですが、何年も罵り合った末、最後にふと漏らす蛙のひとつが書き出しの「山椒魚は悲しんだ」という一文と同じくらい、印象強く心に残ります。

\*戦争が生んだ悲劇の重み

B913.6-I 『黒い雨』 井伏 鱒二 || 著 新潮社

第二次世界大戦中、原子爆弾が落とされた広島の様子が、主人公の手記を主として書かれています。淡々とした文章でありながら、『事実において、天は裂け、地は燃え、人は死んだ』という本文中の言葉のとおり、浮かんでくる光景は凄惨を極めます。その場では生き残れた人々も原爆症に体を蝕まれ命を失っていく。主人公自身も原爆症と診断を受け、闘病を続けていましたが、やがて原爆投下後に降った黒い雨にうたれた姪にも恐れていた症状が出始めます。彼の手記から伝わってくる言いようのない苦しみから、現実にもこのような惨事が日本の地で起こったのだということを改めて胸に刻むと同時に、『正義の戦争より、不正義の平和の方がいい』という言葉を読み終わった後も深く考えさせられます。

## 💖 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 💖

新着コーナーでパッと目に入った『夢をかなえるゾウ』の著者水野敬也さんの『運命の恋をかなえるスタンダード(913.6-ミ 文響社)』を読みました。スタンダードといえば、フランスの文豪で『赤と黒』が代表作のひとつですが、なんと彼は『恋愛論』なるものも書いているのです。



その『恋愛論』を恋に悩む主人公がタイトルに惹かれ、開くと、なんとということでしょう、目の前にスタンダードが現れます。「とうとう幻覚が見えてしまった…」と絶望する主人公をよそに威勢よく「君の恋愛を成就させてあげよう」と宣言するスタンダード。全然、気持ちが一致していないふたりがタッグを組み、恋愛成就を目指し、奮闘します。おせっかいで、失礼で、でもどこか憎めないスタンダードと、内に籠りがちな主人公が自分の殻を破っていく様子がおもしろいし、スタンダードの『恋愛論』に興味湧いてきます。その全貌がどんなものなのか、確かめてみようかな。 【今井】

「A was an apple-pie!」突然「マザーグース」ですが、アップルパイを作ろうとする時、口にすると、勢いにつきませんか？前々からパイ生地も手づくりでアップルパイを焼けるようになりたいと思っていました。でも、自分でパイシートを作るのは生地を休ませる時間や折り込む手間がかかり、とても大変そうで、つい放置。そしてこの度見つけたのが、『バターなしでおいしいパイとタルト』(596.6 成文堂新光社)です。この本のレシピの特徴は、バターの代わりにサラダ油を牛乳と水で乳化して使い、生地を休ませる時間がいらぬことです。作ってみると、口当たりのよい、ザクザクした触感を楽しめるものができました。フィリングも美味しい味付けでした。今度は同じ生地で作れるハニーエッグタルトも試してみたいなりました。ただ、バターの風味がないのはやっぱり物足りない気がします。今度は溶かしバターで試してみたらどうなるかなあ。「♪ B bit it ♪」 【鈴木】

